

信山丸(しんざんまる)

登録番号：第37号

育成者：東城喜久 小林祐造

登録年月日：昭和55年3月31日

中島富衛

登録者：長野県(長野市南長野字幅

来歴：「山形3号」の自殖実生

下692-2)

登録取消：(平成3年4月1日)

特性

■栽培特性

樹勢はやや弱く、樹姿はやや直立性を示す。枝梢は暗褐色で、枝の発生量は多く、花芽の着生は良好である。発芽期、開花期は育成地で4月上～中旬で、「信州大実」、「新潟大実」等の主要品種に比べて、1～2日早い。花は一重で普通咲き、大きさはやや小さく、色は淡桃色でやや淡い。葉の大きさは中位で、葉は広卵形、葉色は緑で、葉面の毛じは多い。自家和合性であるが、単一品種で栽培すると結実不安定になる。受粉樹の混植により結実が安定する。また、着果過多になると、果実品質が低下し、樹勢が衰弱しやすいため、摘果が必要である。収穫期は満開後75～80日で、育成地(長野県須坂市)で7月上旬に成熟し、「平和」より約5日遅く、「信州大実」より約2週間早い早生種である。果実は小さいので、収量は「信州大実」等の大粒な品種に比べると少ない。

■果実特性

「信山丸」の名前の由来は、果形から連想されるイメージではなく、丸あんず加工に適していることから命名された。

果形は短楕円形、果頂部は平で、こうあ部の深さは中程度である。赤道部の縫合線は、明瞭で浅い。1果重は40g前後で、「平和」、「新潟大実」、「信州大実」に比べると小さい。果皮の地色は、橙色が強く、陽光面の着色が少ない。裂果は少ないが、降雨の多い年にはこうあ部に発生することもある。果実の日持ち性は良好である。果肉は橙色、肉質は密で、果肉繊維は少なく、果汁は多い。淡味、苦味はなく、香気は少ない。

糖度は10%前後、酸度はpH3.2程度でやや多く、加工専用品種である。加工適性は、丸あんず加工の他、二つ割りシロップ漬けも果肉が鮮やかな橙色に仕上がりと、肉崩れがなく、糖液に透明感があり、品質が優れている。核は長楕円形で小さく、離核で核周囲の空洞は大きい。核面はやや滑らかで、刻の深さは浅い。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

胴枯病に対しては、やや弱い傾向があるので、胴枯病防除の他、凍害防止、日焼け防止およびボスカシバ防除を徹底し、樹幹保護に努める。

摘果は満開後20～25日頃実施して、果実が触れ合わない程度の着果間隔に仕上げる。樹勢はやや弱いので、樹勢をやや強めに維持するような肥培管理も必要である。あんずの開花期は、他の樹種より早いので、凍霜害の被害を受けにくい場所が良い。特に、霜穴、霜道を避けて栽植する必要がある。

■地域適応性

あんずの適地は、比較的寒冷地であると言われているが、わが国での地域適応性は比較的広いと思われる。気象条件では、降水量の多少が適地を左右する大きな要因であり、特に、開花期と成熟期に降雨が少ない地帯が適する。園地は土層が深く、地下水位の低い、排水良好な肥沃地が適する。

(宮沢孝幸)